

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和5年度 病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、発生予察注意報第2号（果樹カメムシ類）を発表します。
なお、本情報は病害虫防除所ホームページ（www.jpnpn.ne.jp/kagoshima）にも掲載しています。



病害虫発生予察 注意報第2号

果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ）予察灯の誘殺虫数が平年より早い時期から急増しています。また、果樹園での被害が懸念されますので、飛来を認めたら直ちに防除して下さい。

1 農作物名 カンキツ， ナシ等

2 病害虫名 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ， ツヤアオカメムシ）
Plautia crossota stali Scott, *Glaucias subpunctatus* (Walker)

3 発生地域 県本土

4 発生量 多

5 注意報発令の根拠

- 出水市美原町，いちき串木野市湊町および南さつま市金峰町の予察灯では，8月4～5半旬に入りチャバネアオカメムシの誘殺虫数が平年より早い時期から急増している。ツヤアオカメムシも増加傾向である（図1）。また，一部のカンキツ園では飛来を認めた。
- 8月18日～23日に調査したヒノキ球果の口針鞘数（カメムシ類の吸汁痕数）は，各地点で増加している。特に，出水①では平均で23.8本/果（平年10.8本/果）と増加し，カメムシ類が山林のヒノキから周辺果樹園等へ移動する目安である25本/果に近づきつつある（表1）。
- 8月18～23日に調査したヒノキ球果での発生虫数調査では，本年のチャバネアオカメムシの成幼虫数は平年より多い（表2）。また，ヒノキの球果量は平年よりやや多く（表3），新生世代の発生量はやや多いと推察される（8月18日付け技術情報第10号）。

6 防除対策及び防除上注意すべき事項

- 餌植物の劣化や台風等による球果の落果等で餌不足になると，成虫が果樹園へ飛来する可能性があるため注意する。
- 果樹園への飛来はほ場により異なり，園内でも偏りがあるので注意深く見回り，飛来を認めたら直ちに防除する。
- 一回目の防除は残効の長い合成ピレスロイド系薬剤またはネオニコチノイド系薬剤を選択する。なお，合成ピレスロイド系薬剤はミカンハダニの発生を助長するので，散布後の発生に注意する。
- 防除にあたっては，防除薬剤の使用回数や使用時期を遵守し，薬剤の飛散に十分注意する。

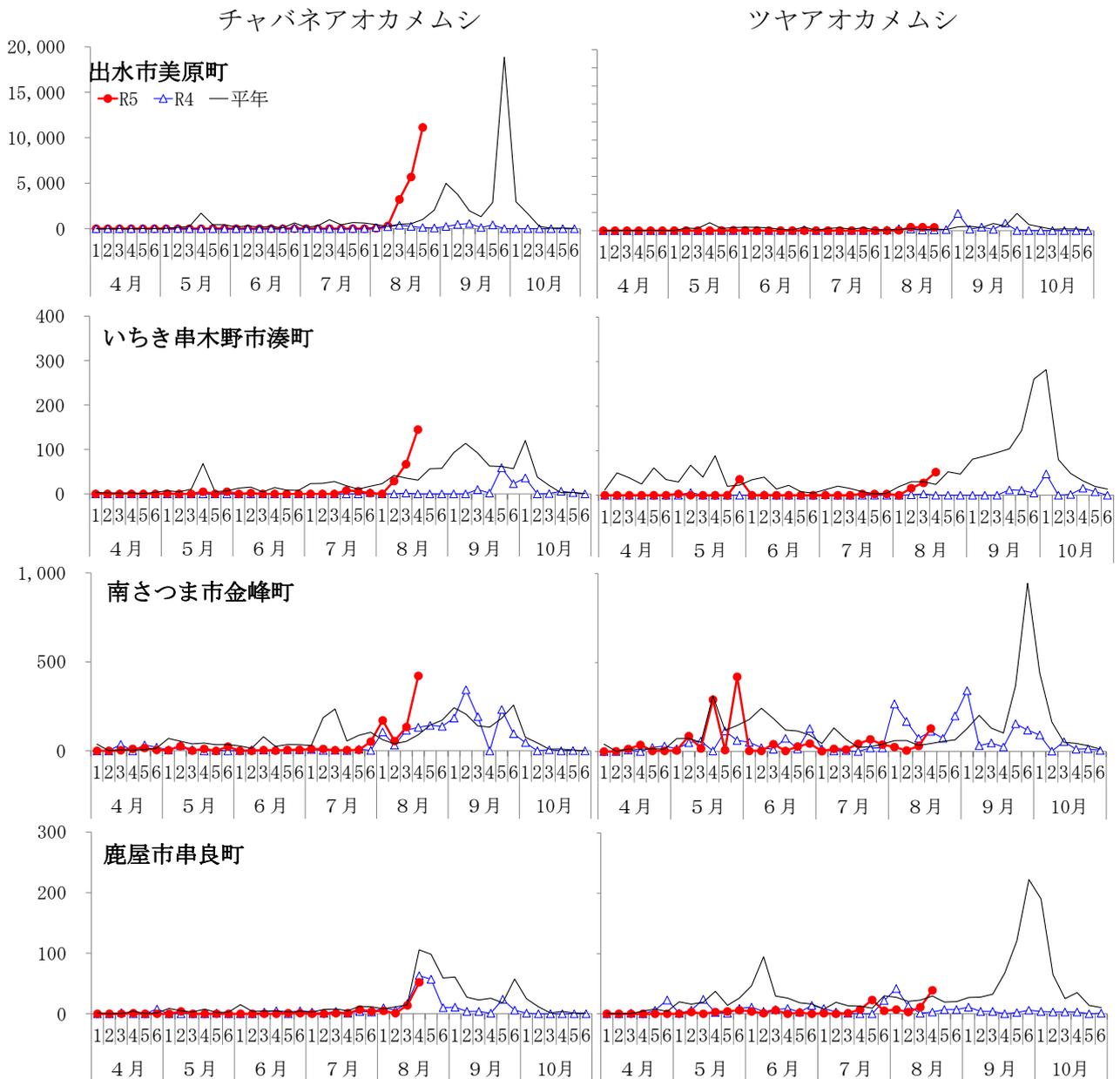


図1 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

注) 平年は、2013～2022年の10年間の平均

表1 ヒノキ球果の口針鞘数 (カメムシ類の吸汁痕数) (単位: 本/果)

調査地点	調査月日			
	7月10～13日	7月24日	8月7日	8月18～23日
南さつま市	0.0	0.4	0.0	6.3
いちき串木野市	3.5	7.6	18.5	19.7
阿久根市	0.0	3.6	18.6	15.6
出水市①	1.4	6.8	10.9	23.8
出水市②	0.2	4.0	10.6	15.4
さつま町	0.2	1.6	5.4	13.8
霧島市	0.0	0.0	0.9	6.8
曾於市	0.0	0.6	0.6	9.8
本年	0.7	3.1	8.2	13.9
平年	0.4	2.8	6.9	10.8

注1) 平年は、2013～2022年の10年間の平均

2) カメムシがヒノキ球果から離脱する目安は、口針鞘数25本/果

表2 ヒノキ球果での発生虫数（8月18～23日調査） (単位：頭/5枝)

	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	幼虫	成虫	計	幼虫	成虫	計
本年	0.6	3.1	3.7	0.0	0.1	0.1
平年	0.2	1.2	1.4	0.0	0.1	0.1

注1) 本年は、1地点あたり5枝の結果枝を調査し県内8地点の平均
 2) 平年は、2013～2022年の10年間の平均

表3 餌植物（ヒノキ）の球果量指数

調査地域	程度	本年	平年
南薩	中	54	43
北薩	多	73	46
始良	やや多	69	48
大隅	やや多	64	41
平均	やや多	65	45

注1) 球果量は目視による達観調査（30地点），評価は7段階（極多, 多, やや多, 中, やや少, 少, 極少）
 2) 球果量指数は愛媛県（2018）による。球果量が多いと指数が高く，少ないと指数が低くなる
 3) 球果量指数： $\frac{(\text{極多地点数} \times 7) + (\text{多地点数} \times 6) + (\text{やや多地点数} \times 5) + (\text{中地点数} \times 4) + (\text{やや少地点数} \times 3) + (\text{少地点数} \times 2) + (\text{極少地点数} \times 1)}{(\text{総地点数} \times 7)} \times 100$
 4) 平年は、2013～2022年の10年間の平均